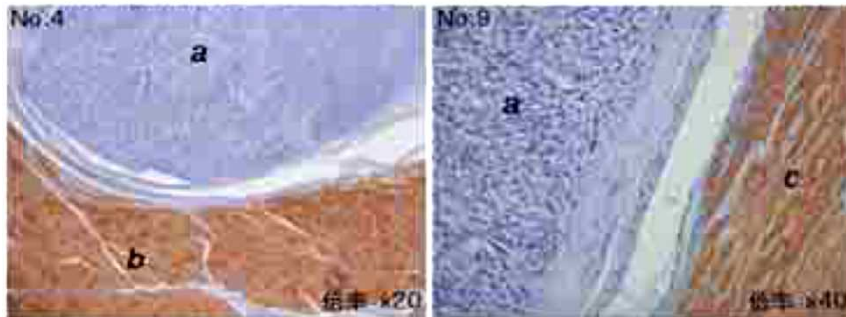


# 免疫組織化学的バイオマーカーによる 子宮間葉性腫瘍の予後予測法の技術の事業化検証

課題番号：STSC20001  
研究代表者：国立病院機構京都医療センター  
研究室長 林 琢磨

研究開始時の研究の概要：子宮間葉性腫瘍に対する悪性・良性の外科病理診断は、困難を伴う場合がある。実臨床において、特に、STUMPやLMS with Bizarre nucleiなどの悪性度の診断に対する客観的な診断法の確立が必要とされている。私達はプロテアソーム構成因子LMP2の欠損マウスで、子宮肉腫が高頻度に自然発症することを報告した(利根川 進 教授の研究協力)。

免疫組織化学染色: SIGMA-Aldrich 抗ヒトLMP2 モノクローナル抗体



a: 子宮平滑筋肉腫、b: 正常子宮平滑筋、c: 子宮平滑筋腫  
(患者 No. 4 and No. 9.)

手術摘出組織を抗ヒトLMP2抗体を用いて免疫組織化学染色で検討を行なった。正常子宮平滑筋組織と子宮平滑筋腫において、LMP2の発現が認められた(茶色)が、子宮平滑筋肉腫においては、LMP2の発現がみとめられなかった(薄い青色)。

さらに、臨床研究より、私達は、LMP2の発現消失とCyclin Eの発現が子宮肉腫の発症と患者の予後に関連していることを報告した。Caveolin、Cyclin B、Cyclin E、Ki-67とLMP2とのコンビネーションは、外科的摘出組織を用いた病理組織学的解析で子宮筋腫と子宮肉腫の鑑別に対するバイオマーカーとしての高い正診率(92%)を有している。子宮間葉性腫瘍に対する外科病理診断の補助診断法の確立を目的とする。

さらに、本研究成果を小さい規模のクリニック等でも簡便に行える「子宮間葉系腫瘍に対するリキッドバイオプシー血液・尿を用いた簡便な診断法」の確立へと応用する。